

佳人薄命

『万葉集』には、しばしば恋の三角関係を詠んだ歌がみられます。中大兄皇子の大和三山歌（一三三〇一五）や、勝鹿真間娘子について詠んだ歌（三四三一〜四三三三、九一八〇七・一八〇八）、芦屋処女について詠んだ歌（九一八〇一〜一八〇三、九一八〇九〜一八一、四二二一・四二二二）、また、桜児と呼ばれた女性について詠んだ歌（一六三七八六・三七七八七）などです。



香具山から望む耳成山

り縁の墓とみなしたりして、男性二人が一人の女性を争うという伝説が各地にあったとみられます。

さらには、三人の男性に求婚された縷児という女性にまつわる歌もあります。（一六三七八八〜三七九〇）。

耳無の池し恨めし 吾妹子が来
つつ潜かば 水は洩れなむ

（一六三七八八）

題詞には、三人の男が同時に一人の女に求婚したところ、女は嘆いて「一の女の身の滅易きこと露の如く、三の雄の志の平び難き」と石の如し」と悩み、耳成池のほとりをさまよったあげく水底に沈んだとあります。その

時に、求婚者たちがそれぞれに哀惜の思いを歌にしたということです。

この歌では、吾妹子がやって来て身を投げたら水が干上がってくれればよかったのに、とやるせない思いを耳成の池にぶつけています。

同様の着想を持つ歌が、平安時代の歌物語『大和物語』（第一五〇）にもみられます。ここでは、奈良市の猿沢池を舞台にした采女の伝説とこの歌の類歌が結びつけられています。

現在の耳成山の麓には池があり、池畔にはこの歌碑も建立されていますが、後世のため池であって古代の耳成池の所在地はよくわかっていません。

縷児は特定の一人を選ぶことを避けて自ら死を選んだとありますが、この歌だけが彼女を「吾妹子」と呼び、他の二首の第三者的な呼びかけとは一線を画しています。古代の人々はそこに、この悲劇の真相を託そうとしたのかもしれません。

（万葉文化館主任研究員・井上さやか）